



【登場人物】

源氏の君・・・・・・・・・・白い袴  
頭中将・・・・・・・・・・赤い袴  
左馬頭と頭式部丞  
・・・・・・・・手前の二人

【場面解説】

梅雨の時期、内裏に宿直中の若い公達たちが、夜、宮中での居場所である桐壺の源氏の君の部屋に集まり、源氏に寄せられた恋文を見ながら、それぞれの恋愛談義を披露している、いわゆる「雨夜の品定め」として有名な場面です。

左馬頭や藤式部丞のユニークな恋愛話の後に、頭中将が披露したのは、後に源氏の君が出会う事となる夕顔の君のことでした。上流階級より「中の品(中流)」にこそ、ユニークな女性が多いと盛り上がる彼らの女性論を聞きながらも、忘れ得ぬ人・藤壺宮は非の打ち所がない、と頭の中がいっぱいな源氏の君はこの時まだ17歳。

この「雨夜の品定め」がきっかけとなり中流の女性に興味を持った源氏の君が、この後に続く、空蝉の君や夕顔の君との恋愛を繰り広げる布石となっています。

【現代語訳】

あなたと結婚しての年月を振り返り、指を折って数えてみても、あなたの欠点はいくらもありませんね。

【詞書】ことばがき 扇面に書かれている文字

手をおりて  
あひ見しことをかぞふれば  
これひとつやは  
君がうきふし

(左馬頭から指くいの女への和歌)